

2011年8月1日

..ティータイム



沢村 郁  
私がこのズボンを物色していたり、客と店主とであつたりだ。ゆったりと時間が流れていて安心していらる。

「鯉色」の綿ズボンを愛用している。丈はくるぶし、幅が広く、この暑さのなかでも風が通って涼しく快適だ。

「鯉色」とは、このズボンを購入する時、店のおばさんが言ったのだ。場所は本部の町営市場内の小さな衣料店。私はこの市場が好きで、北部に行った時はできるだけ立ち寄って、目的もなくブラリとする。

本紙の文化欄コラム「落ち穂」で「もとぶ手作り市」の主宰者、知念正作さんがマチグワの魅力を連載されている。市場ではあちこちで、ゆんたくひんたく中。客同士であつたり、客と店主とであつたりだ。ゆったりと時間が流れていて安心していらる。

## 「鯉色」の綿ズボン

た時も、店主は向かいの手作りの小物店でなかゆくい中だった。店は無人。この市場には「物騒」という文字はないらしい。

ズボンはほかにもたくさんあつて、一律500円。Tシャツやブラウスもあつた。深い藍色の線が真ん中と真横に走っていて、水色の縦じまに黄色い細いしまがアクセントになっている。気に入った。

「すみませんーん、くださいーい！」と叫んだ。戻ってきたおばさんは、ズボンを受け取り「あ、これ！鯉色さ！本部の色ね！」と言った。

なるほど鯉は本部の特産だ。でも那覇で暮らしている私にはズボンの色を「鯉色」とは結び付けられない。こんなちよつとしたことにも、本部んちゅの地元への愛情の深さを発見したのだった。

(那覇市、51歳)

(2011年8月1日付 8面)

☆みんなの住んでいる地域を色に例えると「何色」かな？考えてみよう。

年 組 名前